



Title	現代新聞語彙における副用語の“非基本語化”：使用率減少と散布度増加の関係からみた量的類型
Author(s)	石井, 正彦
Citation	現代日本語研究. 2022, 14, p. 44-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92774
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代新聞語彙における副用語の“非基本語化”

—使用率減少と散布度増加の関係からみた量的類型—

Quantitative Trends in the Withdrawal of Adverbial Words from the Basic Vocabulary of Modern Newspapers: Relationships Between the Decrease in Relative Frequency and the Increase in Lexical Dispersion

石井 正彦

ISHII Masahiko

キーワード：現代新聞，基本語彙，（非）基本語化，副用語，使用率，散布度

要 旨

先に 20 世紀半ば以降の『毎日新聞』をデータとする通時コーパスから取り出した「基本語化」および「非基本語化」の候補語（石井 2022）のうち，品詞レベルでまとまって非基本語化したと考えられる「副用語」（副詞・接続詞・連体詞）23 語について，1960 年以降の非基本語化の過程を「使用率の減少傾向」と「散布度の増加傾向」との関係として類型化する作業を行った。非基本語化の過程では，語の各年使用率は減少し，各年散布度は増加するが，使用率が 0.05% を下回るかそれに近づくと散布度が増加を始めるという語が，合わせて 18 語と全体の約 8 割を占める。現代の新聞語彙における副用語の非基本語化には，使用率 0.05% 付近を「閾値」として使用率の減少が散布度の増加を誘起するという局面があり，その局面の前後で両者の量的関係が「使用率減少・散布度非増加」から「使用率減少・散布度増加」に変化するという類型がある。

1. はじめに

語彙の，とりわけその基幹的な部分としての「基本語彙」の変化を明らかにするには，個別の語が新たに基本語彙の仲間入りをする「基本語化」と，逆に基本語彙から外れる「非基本語化」というミクロな変化をとらえなければならない。拙稿（石井 2022）では，現代（20 世紀半ば以降）の新聞語彙を対象に，

基本語化・非基本語化した語の取り出しを試みた。具体的には、『毎日新聞』をデータとする通時コーパスを用いて、使用率の変化を必要条件、散布度の変化を十分条件とし、それぞれの（1960年から2010年までの50年間ににおける）平均変化率を調査年すべてに使用例のあった語を対象に算出して、基本語化・非基本語化ともに100語程度の候補語を抽出した。それらを語種・品詞の語類別にまとめると、次ページの表1（石井2022:20-22）のようになる。

表1を見ると、和語の名詞・動詞、および、漢語の（サ変可能を含む）名詞については、基本語化候補語と非基本語化候補語とがどちらも多く、これらの基本語化・非基本語化が、語種や品詞を理由とする変化ではなく、そのサブカテゴリーか、あるいは個別の語の何らかの特徴がかかわる変化であることが予想される¹⁾。

これに対して、外来語の（サ変可能を含む）名詞については、基本語化候補語の方が非基本語化候補語より明らかに多く、外来語という語種カテゴリーがこれらの基本語化に深く関係していることが推測される。

一方、副詞については、和語・漢語・混種語ともほぼ非基本語化候補語のみとなっており、これらが副詞であることがその非基本語化に関係している可能性がある。これに、語数は少ないものの、やはり非基本語化候補語のみである和語接続詞と和語連体詞とを加えると、要するに「副用語」と言われる品詞上のまとまりがこれらの非基本語化に関係していることが推測される。

副用語は、一般に「文中で骨組みとなる部分を詳しく修飾したり、適当につなぎあわせたりという二次的な役割を果たす（略）副詞・感動詞・接続詞・連体詞の総体」としてとらえられる語群（畠郁 1991:15）であるから、表1に見るような副用語の非基本語化が事実であれば、それは20世紀半ば以降の新聞文章からこうした二次的な役割を果たしてきた語の使用が減り、結果としてそれら（の一部）が基本語彙から外れて非基本語化したことを示すものである²⁾。

ただし、このような見通しを確かなものにするためには、これら副用語の非基本語化の過程を量的・質的に詳しく記述し、それが真に非基本語化と呼べるものであることを確認する必要がある。本稿は、その手始めとして、表1の太枠で囲んだ副用語23語がどのように非基本語化したのか、その過程を、非基本語化の指標とした使用率と散布度の推移から探る試みである。

表1 基本語化・非基本語化の候補語 (表記は『Web茶まめ』の語彙素に従う)

	基本語化	非基本語化
和語名詞	【10語】取り組み, 神, 若手, 床, 光, 島, 生まれ, 思い, 笑顔, 終わり	【12語】序で, 腹, 後, 初め, 型, 主, 波, 代わり, 取り扱い, 折, 程, 者
和語動詞	【16語】明かす, 担う, 繋げる, 込める, 受け止める, 隠す, 下がる, 探る, 増す, 支える, 振り返る, 崩す, 異なる, 築く, 止める, 取り組む	【12語】止む, 直す, 移る, 出掛ける, 経つ, 取り付ける, 取り上げる, 食う, 恐れる, 分ける, 撒く, 申し入れる
和語形状詞	【1語】前向き	【3語】静か, 余り, 盛ん
和語形容詞	【1語】甘い	【1語】酷い
和語副詞	【1語】確り	【12語】兎も角, 益々, 愈, 寧ろ, すっかり, はっきり, 却って, 大いに, 暫く, 若し, 詰まり, 遂に
和語接続詞		【3語】猶, 或いは, 尤も
和語連体詞		【1語】所謂
和語接尾辞		【1語】着
漢語名詞	【24語】名, 文科, 職, 囲碁, 体調, 複数, 普段, 前線, 将棋, 詳細, 人生, 近年, 週, 未来, 直後, 名人, 疑惑, 兄弟, 現役, 世紀, 冷静, 同級, 瞬間, 外部	【31語】一応, 標準, 一行, 連, 正午, 適当, 団長, 戦前, 半面, 農民, 多少, 弾力, 今度, 大体, 方面, 台風, 博士, 定期, 公社, 両日, 実情, 一切, 地帯, 会館, 根本, 権利, 注, 大衆, 範囲, 一斉, 近代
漢語名詞 (サ変可能)	【26語】明言, 流通, 交流, 選択, 位置, 対応, 反応, 合格, 移動, 交代, 受賞, 観戦, 食事, 広報, 変動, 分析, 手術, 優先, 表示, 撮影, 和, 認識, 公表, 貢献, 限定, 感謝	【15語】始末, 特派, 親善, 立法, 世話, 通達, 許可, 渡米, 改定, 結成, 無視, 楽, 短縮, 進歩, 約束
漢語代名詞	【1語】僕	
漢語形状詞	【1語】残念	【1語】早急
漢語副詞		【6語】当然, 相当, 依然, 一杯, 一旦, 十分
漢語接頭辞	【1語】多	
漢語接尾辞	【6語】事, 弾, 同士, 光, 誌, 児	【2語】式, 鉄
外来語名詞	【14語】ネット, スーパー, ビデオ, メッセージ, レベル, ファン, ランク, バランス, メンバー, カード, イン, タイプ, ハウス, テーマ	【3語】ラジオ, ダム, ビール
外来語名詞 (サ変可能)	【3語】イメージ, インタビュー, コメント	
混種語名詞		【1語】大勢
混種語動詞	【1語】頑張る	【2語】期する, 要する
混種語形状詞		【1語】可成
混種語副詞		【1語】可成

2. コーパスとデータ

石井(2022)では、金愛蘭氏が元版を作成し、筆者もその後の増補・改訂に共同研究者として協力した『毎日新聞経年コーパス(第3版)』³⁾を用いた。同コーパスの1960年から2010年まではほぼ10年おき6年分(1960・70・80・91・2000・10年)の、〈一面〉〈国際〉〈経済〉〈家庭〉〈スポーツ〉〈社会〉の6紙面をデータとして、国立国語研究所の『Web茶まめ』と表計算ソフトExcelのピボットテーブル機能による語彙調査を行い、調査年すべてに使用例のあった見出し語(短単位)を対象に、各年の使用率と散布度DP(Gries 2008)およびそれぞれの平均変化率を算出して、基本語化・非基本語化ともに100語程度の候補語を抽出した(散布度DP・平均変化率の計算法はじめ、抽出の詳細については、石井(2022)を参照されたい)。非基本語化の場合は、概略、

1960年に基本語彙の中(使用率順上位10%内)にあり、2010年までに使用率が平均変化率0.9以下で減少し、かつ、散布度DPが平均変化率1.05以上で増加して、2010年に基本語彙の中(使用率順上位10%内)にない(固有名詞・数詞を除いた)語

という抽出基準で、108の候補語を取り出した。次ページの表2は、本稿で対象とする副用語23語の、この際のデータを示したものである(配列は使用率平均変化率の昇順。使用率は%。品詞分類は『Web茶まめ』によるもの。なお、表中の太枠と灰色で示したセルについては後述)。

上の抽出基準からもわかるように、石井(2022)では平均変化率という変化の大きさだけを問題としており、同じ非基本語化候補語であっても、それぞれの変化の過程がどのようなものであり、そこにどのような類型があるかなどということはわからない。また、表2の、各年の使用率や散布度の数値をたどって見ても、これら23語がどのように非基本語化したのか、簡単にはわからない。要するに、単に非基本語化した(可能性がある)というだけでなく、どのように非基本語化したのか、その過程を詳しく記述する必要があるのである。

3. 類型の探索と発見

上述したように、石井(2022)では、使用率と散布度それぞれの平均変化率を主な指標として、基本語化・非基本語化それぞれの候補語を取り出している。

表2 非基本語化候補の副用語 23 語

語彙素読み	語彙素	品詞	語種	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年	2010年	平均変化率
				頻度 使用率 D P	頻度 使用率 D P	頻度 使用率 D P	頻度 使用率 D P	頻度 使用率 D P	頻度 使用率 D P	
ツマリ	詰まり	副	和	61	94	85	27	20	5	0.562 1.097
				0.124 0.206	0.141 0.214	0.122 0.341	0.034 0.289	0.026 0.367	0.007 0.327	
ナオ	猶	接	和	184	125	49	19	16	17	0.576 1.206
				0.373 0.114	0.187 0.139	0.070 0.055	0.024 0.388	0.021 0.273	0.024 0.291	
カナリ	可成	副	混	148	146	100	36	34	16	0.594 1.169
				0.300 0.159	0.218 0.174	0.143 0.217	0.046 0.159	0.044 0.338	0.022 0.347	
イヨイヨ	愈	副	和	58	30	18	9	12	8	0.624 1.240
				0.118 0.137	0.045 0.310	0.026 0.234	0.011 0.352	0.016 0.235	0.011 0.401	
トモカク	兎も角	副	和	35	38	28	11	5	5	0.628 1.451
				0.071 0.090	0.057 0.210	0.040 0.244	0.014 0.330	0.006 0.362	0.007 0.576	
ムシロ	寧ろ	副	和	81	58	62	29	36	12	0.633 1.205
				0.164 0.171	0.087 0.249	0.089 0.196	0.037 0.227	0.047 0.315	0.017 0.434	
トウゼン	当然	副	漢	46	43	26	20	13	7	0.636 1.222
				0.093 0.170	0.064 0.138	0.037 0.237	0.025 0.214	0.017 0.303	0.010 0.465	
スッカリ	すっかり	副	和	46	50	27	25	6	7	0.636 1.182
				0.093 0.243	0.075 0.275	0.039 0.243	0.032 0.341	0.008 0.402	0.010 0.561	
モットモ	尤も	接	和	35	38	37	9	12	6	0.652 1.105
				0.071 0.269	0.057 0.273	0.053 0.268	0.011 0.307	0.016 0.303	0.008 0.443	
イワユル	所謂	連	和	53	54	44	11	13	10	0.664 1.072
				0.107 0.295	0.081 0.294	0.063 0.275	0.014 0.403	0.017 0.354	0.014 0.419	
ハッキリ	はっきり	副	和	110	150	120	61	45	21	0.666 1.143
				0.223 0.123	0.224 0.063	0.172 0.110	0.078 0.152	0.058 0.226	0.029 0.241	
アルイハ	或いは	接	和	51	84	84	27	18	10	0.669 1.180
				0.103 0.186	0.126 0.209	0.120 0.290	0.034 0.345	0.023 0.350	0.014 0.427	
ソウトウ	相当	副	漢	51	15	21	11	5	11	0.682 1.201
				0.103 0.204	0.022 0.144	0.030 0.287	0.014 0.506	0.006 0.554	0.015 0.509	
オオイニ	大いに	副	和	46	29	21	10	6	10	0.683 1.135
				0.093 0.253	0.043 0.355	0.030 0.155	0.013 0.378	0.008 0.316	0.014 0.476	
マスマス	益々	副	和	50	36	45	32	24	11	0.685 1.274
				0.101 0.124	0.054 0.093	0.065 0.213	0.041 0.453	0.031 0.410	0.015 0.416	
ジュウブン	十分	副	漢	89	92	66	54	31	24	0.713 1.059
				0.180 0.214	0.138 0.173	0.095 0.134	0.069 0.082	0.040 0.184	0.033 0.285	
カエッテ	却って	副	和	40	33	19	10	16	12	0.729 1.140
				0.081 0.192	0.049 0.289	0.027 0.426	0.013 0.463	0.021 0.192	0.017 0.369	
ツイニ	遂に	副	和	48	63	43	19	16	17	0.753 1.083
				0.097 0.210	0.094 0.164	0.062 0.175	0.024 0.298	0.021 0.253	0.024 0.312	
モシ	若し	副	和	81	90	77	36	36	33	0.775 1.115
				0.164 0.205	0.135 0.153	0.110 0.182	0.046 0.230	0.047 0.273	0.046 0.353	
イッパイ	一杯	副	漢	30	35	19	19	17	14	0.796 1.079
				0.061 0.237	0.052 0.326	0.027 0.158	0.024 0.433	0.022 0.450	0.019 0.346	
イゼン	依然	副	漢	53	69	75	68	50	25	0.798 1.125
				0.107 0.333	0.103 0.319	0.108 0.289	0.087 0.379	0.065 0.458	0.035 0.600	
シバラク	暫く	副	和	30	33	30	22	23	15	0.807 1.124
				0.061 0.260	0.049 0.284	0.043 0.347	0.028 0.104	0.030 0.113	0.021 0.466	
イッタン	一旦	副	漢	35	52	36	38	29	19	0.821 1.067
				0.071 0.263	0.078 0.229	0.052 0.204	0.048 0.140	0.038 0.248	0.026 0.365	

したがって、基本語化・非基本語化の過程を量的に記述し、そこに何らかの傾向や類型を見出そうとするなら、まずは、それぞれの語について、(平均変化率ではなく)各年の使用率・散布度の数値の推移および両者の関係を見ることになる。本稿の場合なら、対象とする副用語 23 語について、表 2 の各年の使用率と散布度の推移を折れ線グラフに表し、両者の関係を視覚的にとらえることなどが考えられる。たとえば、図 1 は、表 2 で散布度 DP の平均変化率が最も大きかった「兎も角(ともかく)」について、各調査年の使用率の推移を濃い実線で、同じく散布度の推移を薄い実線で表した折れ線グラフである。グラフの軸は、横軸が調査年、縦軸は、左が使用率(%), 右が散布度となっている。なお、二つの折れ線の上下の位置関係(どちらが上にあるか、どこで交差するかなど)は、それぞれの縦軸のスケールによって簡単に変わってしまうものであり、意味をもたないことに注意されたい。

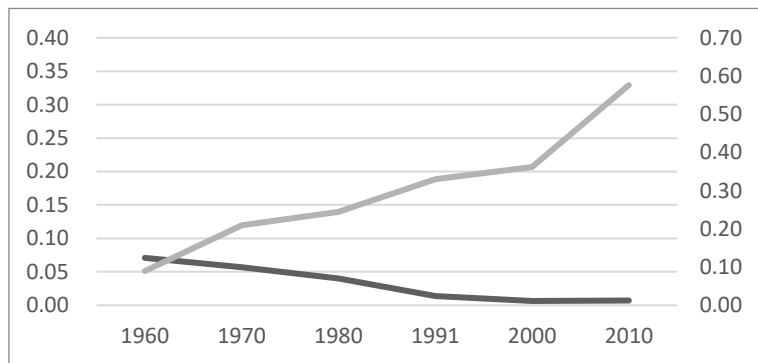


図 1 「兎も角(ともかく)」の使用率・散布度の推移

非基本語化の過程では、各語の各年使用率は減少し、各年散布度(各紙面の使用率のばらつき)は増加するが、図 1 でも、使用率は 1960 年から一貫して減少し、散布度は同じ 60 年から一貫して増加していて、「兎も角」の非基本語化の動きが 1960 年代から始まり(それ以前のデータがないため、実際にはもっと前から始まっていた可能性もあるが)、その後も継続していることがわかる。

とはいえ、23 語すべてについて同様のグラフを描いてみると、いずれにも使用率減少・散布度増加という大きな傾向は見られるものの、二つの折れ線の形状や関係は様々であり、それらを適切に類型化する観点や基準を見出すことは

容易ではない。たとえば、図2は、図1と同じ形式のグラフを「すっかり」について描いたものだが、使用率は一貫して減少しているものの、散布度の方は1980年までほぼ横ばいで推移し、その後増加に転じている。また、図3は、同じく「猶(なお)」のグラフだが、こちらも使用率は一貫して減少しているものの、散布度の方は1980年から91年にかけて大きく増加するほかは、その前後に安定した増加傾向を読み取ることは難しい。

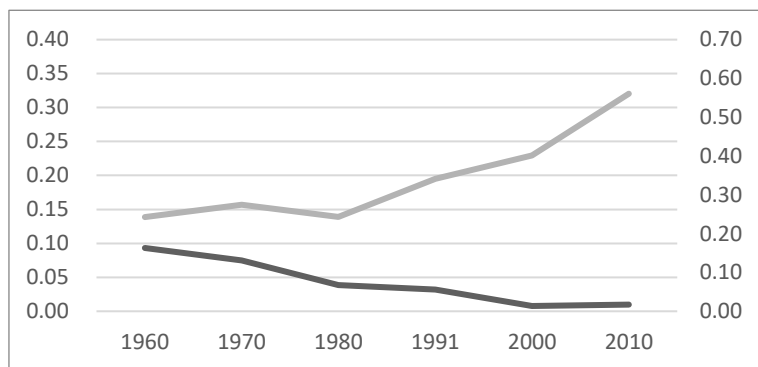


図2 「すっかり」の使用率・散布度の推移

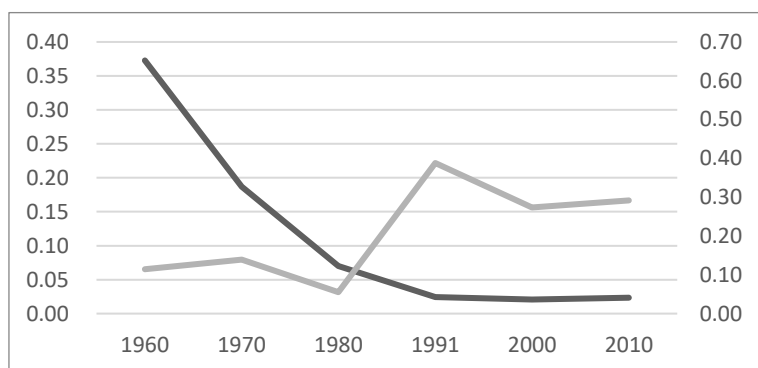


図3 「猶(なお)」の使用率・散布度の推移

そこで、各語の使用率と散布度を一旦切り離し、それぞれの1960年以降の推移を23語まとめて折れ線グラフに表してみると、図4・図5のようになる。二つのグラフを比較すると、使用率(図4)の方が散布度(図5)よりも、23語全体のばらつきが小さく、また、各語の変動も極端な上下動が少なく安定しているように見える。そして、最も注目されることは、使用率のグラフ(図4)

で、最初の調査年である 1960 年にはすべての語の使用率が 0.05‰を上回っているのに、最後の調査年である 2010 年にはすべての語の使用率が 0.05‰を下回っているということである。これは、この使用率 0.05‰という値が、対象とする副用語の非基本語化の過程において、何らかの重要な境界値になっていることを示唆するものである。

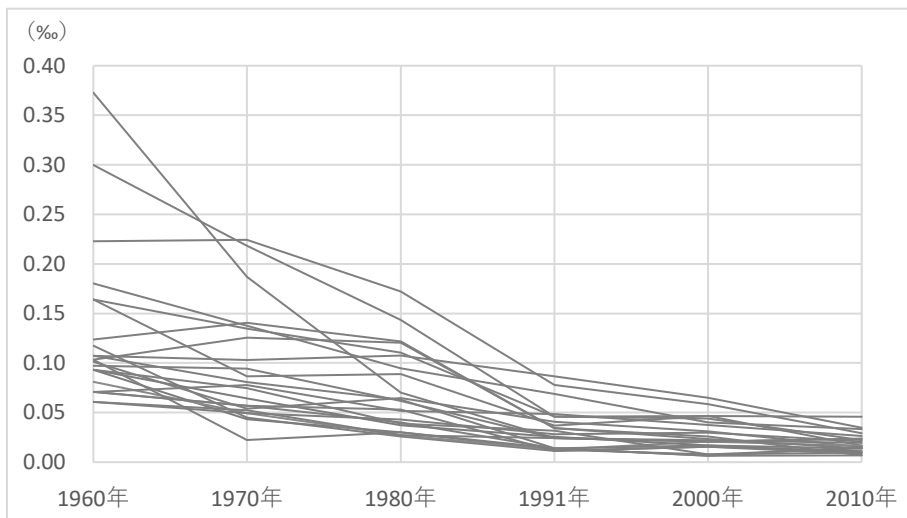


図 4 副用語 23 語の使用率の推移

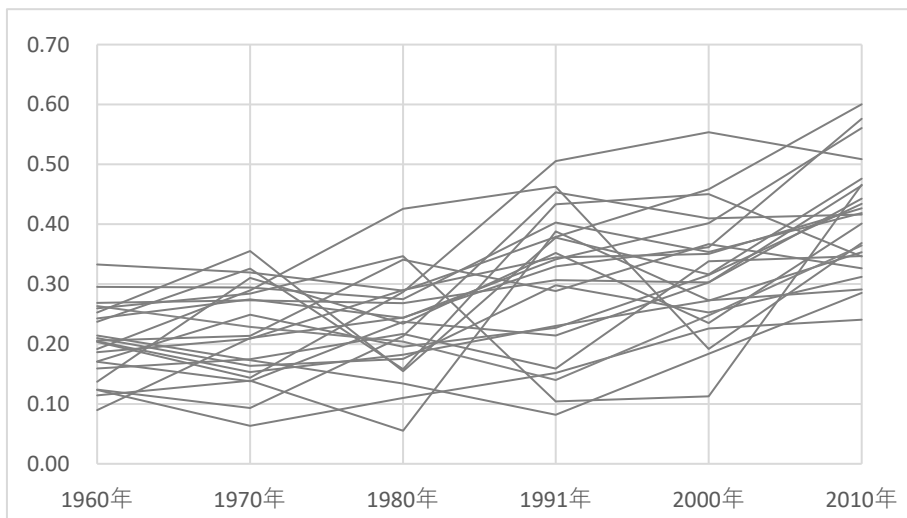


図 5 副用語 23 語の散布度 DP の推移

その上で、改めて各語の使用率減少と散布度増加の関係を探ってみる。いま試みに、表2の副用語23語について、(X)使用率が初めて(上述の)0.05%を下回る年代区間(太線で囲んだセル)と、(Y)散布度が前期を上回って増加し始める区間(灰色に塗ったセル)との前後関係を見ると、

(A) X・Yとも同じ：11語

(B) Xの直後にY：5語

(C) Xの直前にY：4語

(D) 上のいずれでもない：3語

という結果になる。図3の「猶」は、使用率が初めて0.05%を下回るのが1980年代(1980年→91年の区間)、散布度が前期を上回って増加するのも同じ80年代であるから、上の(A)に該当する。また、図2の「すっかり」は、70年代(70年→80年の区間)に使用率が初めて0.05%を下回るが、散布度が前期を上回って増加を始めるのはその直後の80年代である(60年から80年までは横ばいと見る)から、上の(B)に該当し、図1の「兎も角」は、同じく70年代に使用率が初めて0.05%を下回るが、散布度が前期を上回って増加を始めるのはその直前の60年代(60年→70年の区間)であるから、上の(C)に該当する。

このように、使用率が(何らかの重要な境界値である可能性のある)0.05%を下回ると同じかその前後の年代に、散布度が増加し始めることが多いというのは、単なる偶然だろうか。上で見たように、二つの時期が同じ年代に重なる(A)の語は23語中11語、前後に隣り合う(B)と(C)の語を加えると23語中20語となり、「使用率の0.05%を下回る減少」と「散布度の増加の開始」との間には有意な関連があると考えの方が自然である。

その「関連」とは、すなわち「使用率が0.05%を下回る水準まで減少すると、散布度の増加が始まる」というものである。たとえば、図3の「猶」では、使用率は1960年から91年まで一貫して大きく減少するが、散布度の方はすぐには増加せず、60年から80年まで横ばいで推移している(60年→70年の増加はわずかであり、その後すぐに減少してしまう)。しかし、80年代(80年→91年の区間)に使用率が0.05%を割り込むと、散布度も同じ年代で初めて大きく増加する。

図6の「十分(じゅうぶん)」のグラフは、この関連を典型的に示すものであ

る。すなわち、使用率は1960年から2010年まで一貫して減少しているが、散布度の方は60年から91年までは増加どころか減少している。ところが、使用率が90年代（91年→2000年の区間）に0.05%を割り込むと、同じ年代に散布度は一転して増加を始めるのである。

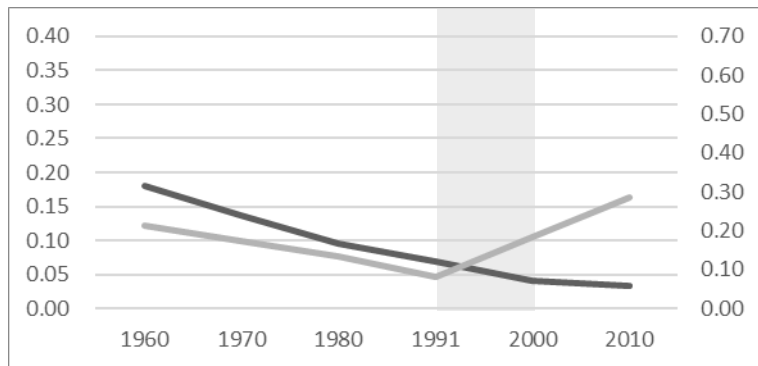


図6 「十分（じゅうぶん）」の使用率・散布度の推移

上の(A)の11語は、この「十分」や「猶」のように、使用率が0.05%を割り込むのと同じ年代に散布度が増加を始める。また、(B)の5語は、図2の「すっかり」のように、使用率が0.05%を割り込んだ直後の年代に散布度が増加を始める。(C)の4語は、使用率が0.05%を割り込む前、その直前の年代に散布度が増加を始めてしまうのだが、そのうち図1の「兎も角」は、その直前の年代に使用率が0.057%まで、また、「益々（ますます）」も同じく0.065%まで減少していて、0.110%までしか減少しなかった「若し（もし）」と、同じく0.122%までしか減少しなかった「詰まり（つまり）」を除けば、23語の約8割に当たる18語で「使用率が0.05%を下回るかそれに近づくと散布度の増加が始まる」という現象が見られることになる。このことから、現代の新聞語彙における副用語の非基本語化には、

- (1) 使用率0.05%付近をいわば「閾値」として、使用率の減少が散布度の増加を誘起するという「局面」があり、その局面となる年代の前後で使用率と散布度との量的な関係が「使用率減少・散布度非増加」から「使用率減少・散布度増加」に変化する
- という類型があるのではないかと考えられる。

この類型は、次のように解釈・説明することもできる。すなわち、これらの副用語は、1960年には基本語彙の中にあつたと考えられるわけだから、その時点では、使用率もそれなりに大きく、散布度も小さいはずである。それらにおいて、まず、何らかの理由によって使用率の減少が始まるが、初めのうち（しばらくの間）、散布度はあまり増加しない（特定の紙面の使用率が極端に減ってしまうまでには至らない）。しかし、そうした使用率の減少が徐々に進行し、0.05%付近を下回る水準まで減少してくると、この段階ではすでにいずれかの、あるいはいくつかの紙面の使用率が非常に小さくなり、紙面間の使用率のばらつきが大きくなって、全体の散布度が増加に転じる。そして、ここからは、使用率の減少に従って散布度が増加するという関係で推移するようになる。

4. 類型の確認

以上、現代の新聞語彙における副用語の非基本語化には、(1)のような類型が想定できるものと考えた。この想定の妥当性を確認するために、以下に、対象とした副用語23語の使用率と散布度の推移を表す折れ線グラフを、上述の(A)～(D)の別に、それぞれの「局面」となる年代の早い順に並べて示す。

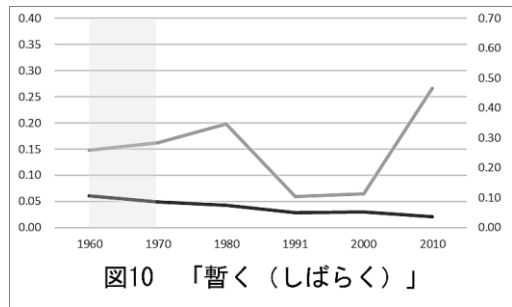
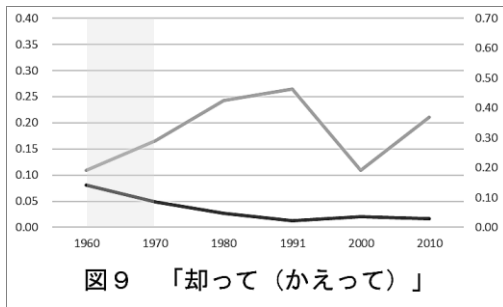
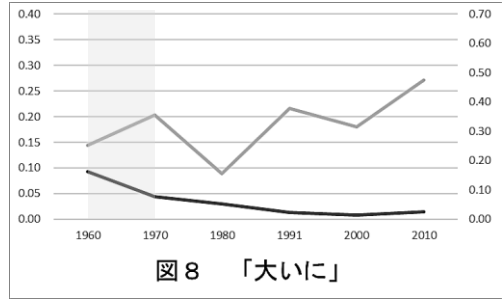
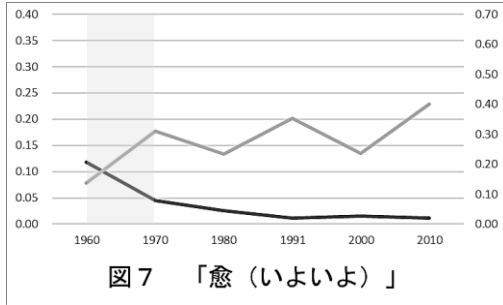
「局面」の年代は、(A)の11語では、使用率が0.05%を下回るとともに散布度が増加を始めた年代、(B)の5語では、使用率が0.05%を下回った年代の直後に散布度が増加を始めた年代、(C)の4語では、使用率が0.05%を下回る年代の直前に散布度が増加を始めた年代とし、(D)に属す3語については、使用率が0.05%を下回る年代とは無関係に散布度が増加を始めた年代とした。要するにすべての語を「散布度が増加を始めた年代」の早い順に並べたことになり、各グラフではその区間を薄い灰色に塗って示している。

グラフの形式は図1と同じで、いずれも、濃い実線が使用率、薄い実線が散布度DPの推移を表す。グラフの軸は、横軸が年代、縦軸は、左が使用率(%), 右が散布度で、すべてのグラフが同じスケールになっている。なお、二つの折れ線の上下の位置関係が意味をもたないことはすでに述べたとおりである。

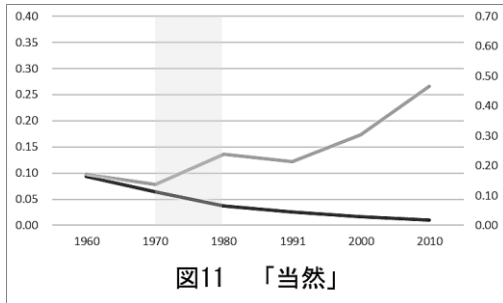
これらのグラフを見ると、散布度に大きな上下動があり、増加傾向が不安定な語（図8～10の「大いに」「却って」「暫く」など）もあるが、(D)を除く各語の使用率と散布度の推移は、概ね類型(1)に沿ったものであることが確認できる。

(A) 使用率が0.05%を割り込むのと同じ年代に散布度が増加を始めた語

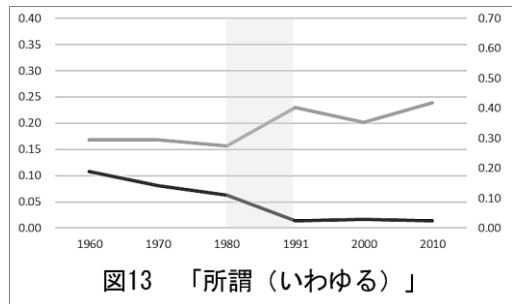
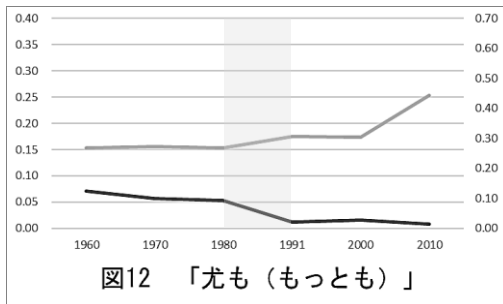
(1960年代から散布度が増加する語)

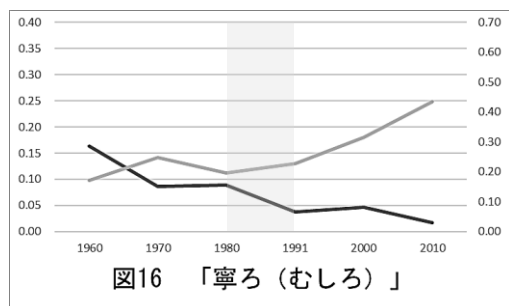
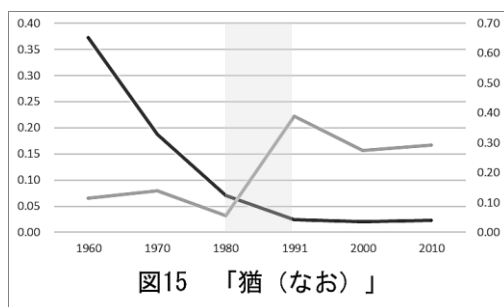
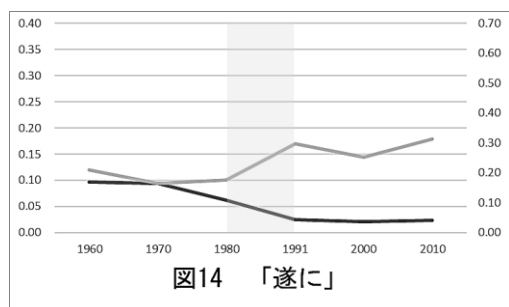


(1970年代から散布度が増加する語)

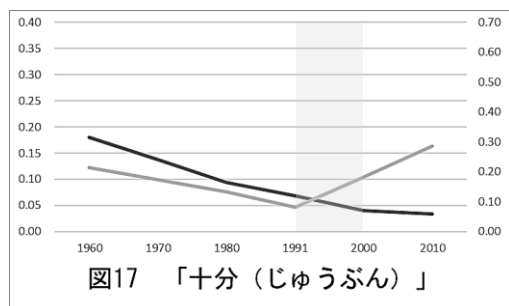


(1980年代から散布度が増加する語)

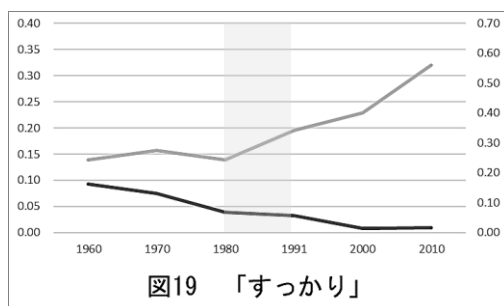
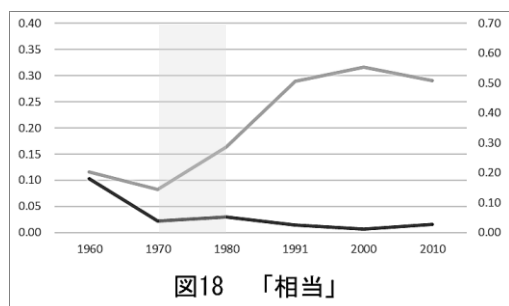


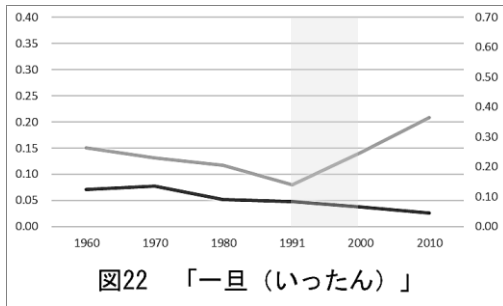
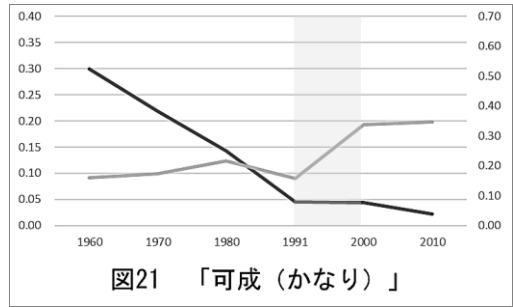
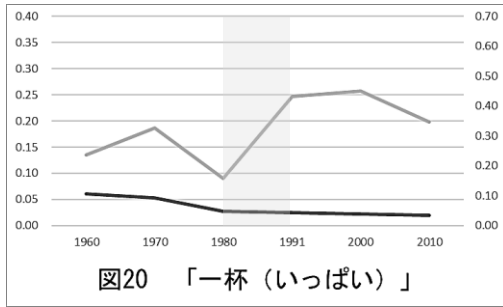


(1990年代から散布度が増加する語)

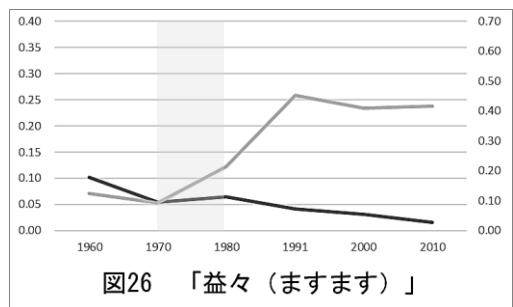
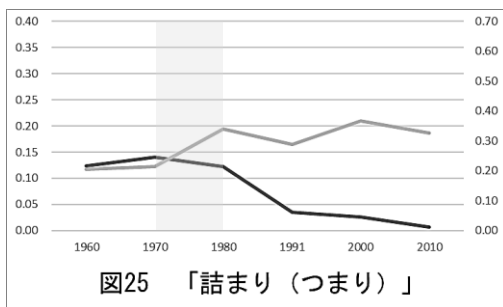
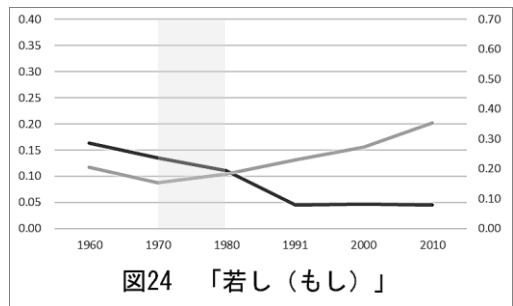
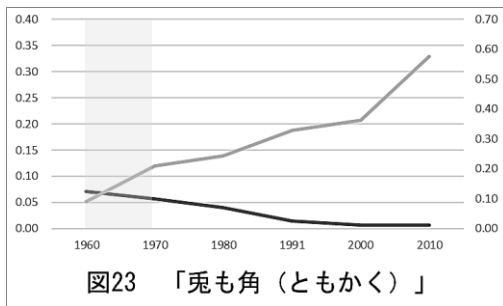


(B) 使用率が0.05%を割り込んだ直後の年代に散布度が増加を始めた語

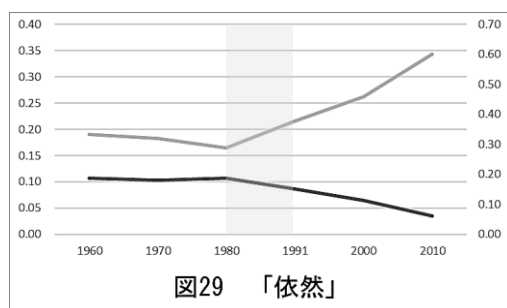
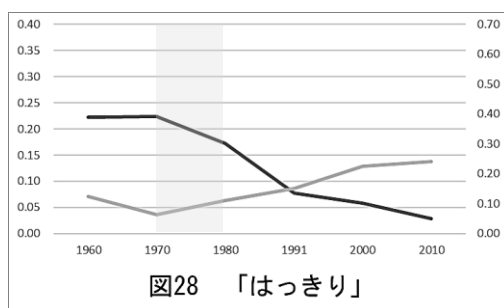
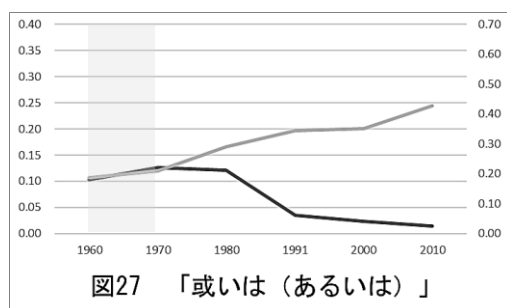




(C) 使用率が 0.05% を割り込む直前の年代に散布度が増加を始めた語



(D) 使用率が0.05%を下回る年代と関連なく散布度が増加を始めた語



5. まとめと今後の課題

以上、非基本語化候補語の副用語 23 語について、その非基本語化の過程に、

- (1) 使用率 0.05% 付近をいわば「閾値」として、使用率の減少が散布度の増加を誘起するという「局面」があり、その局面となる年代の前後で使用率と散布度との量的な関係が「使用率減少・散布度非増加」から「使用率減少・散布度増加」に変化する（再掲）

という類型を見出した。この類型は、今のところ、上で (A) ~ (C) に分けた副用語に共通するものと考えている。(A) ~ (C) の別は、類型の違いではなく、(1) における局面の、(3 節で示した) (X) と (Y) の前後関係のわずかな違いであり、これらは基本的に同じものである。異なるのは「局面」の年代、すなわち、いつ使用率が 0.05% 付近を下回って散布度が増加を始めるかという点であり、これには、副用語それぞれの事情（新聞における意味・用法や文体的価値の変化）がかかっているものと予想される。試みに、23 語を品詞別に、そして、語数の多い副詞を益岡・田窪(1992)を参考に分類し、(A) ~ (D)

の別と掛け合わせると、表3のようになる。語数が少ないこともあるが、こうした分類と「局面」の違いやその年代の違いとの明確な関連は見出せない。

表3 「局面」とその年代別にみた副用語

		副 詞								接 続 詞	連 体 詞	計		
		様 態	程 度	量	テ ン ス	ア ス ペ ク ト	陳 述	評 価	発 言				そ の 他	
(A)	60年代		大いに			愈 暫く					却って			4
	70年代								当然					1
	80年代					遂に					寧ろ	尤も 猶	所謂	5
	90年代		十分	(十分)										1(1)
(B)	70年代		相当	(相当)										1(1)
	80年代			一杯		すっかみ								2
	90年代		可成			一旦								2
(C)	60年代						兎も角							1
	70年代					益々	若し					詰まり		3
(D)		はっきり				依然						或いは		3
計		1	4	1(2)		7	2	1		2	4	1	23(2)	

今後は、使用率がどの紙面から減少を始めるか、散布度が増加を始める際に使用率が減少しているのはどの紙面かといった観点から、各語の使用率と散布度の推移をより具体的に検討し、上の類型(1)をより詳細なものにしていくことが求められる。

このほか、他の語類の非基本語化の過程にどのような類型があるのかを検討することも必要であるが、何より、基本語化の過程の類型を見出すという大きな課題が残っている。基本語化の類型と非基本語化の類型とを照らし合わせることによって、基本語彙の変化はより立体的にとらえることができるはずである。

注

1) 石井(2022)で簡単に論じたように、和語動詞「明かす」の基本語化には、

新聞において「～と明かす」という叙述法が一般化してきたことが関係しているが、これには「話す」をはじめとする和語の談話引用動詞というサブカテゴリーに属する語の変化もかかわっているものと予想される。

- 2) こうした「二次的な役割を果たす」語類の非基本語化は、林(1982)が臨時一語の形成・多用の背景として指摘する新聞の「名詞的なかたまりを大きくして、文章のきめ細かさなどを追求しない大量生産的な文章」という特徴や、金(2006)が外来語の基本語化の背景として指摘する現代新聞の「概略化」の傾向などにも合致するように思われる。
- 3) 『毎日新聞経年コーパス』の詳細については、金(2022)を参照されたい。

引用文献

- 石井正彦(2022)「現代新聞語彙における“基本語化”と“非基本語化”一使用率・均等度の平均変化率を用いた量的検討一」『阪大日本語研究』34(大阪大学), pp. 1-25
- 金 愛蘭(2006)「外来語『トラブル』の基本語化—20世紀後半の新聞記事における一」『日本語の研究』2-2(日本語学会), pp. 18-32
- 金 愛蘭(2022)「現代『語彙史』研究のためのコーパスと統計—『毎日新聞経年コーパス』による語の増減傾向の分析—」『計量国語学』33-4(計量国語学会), pp. 233-248
- 畠 郁(1991)「第一部 副詞論の系譜」国立国語研究所[編]『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』国立国語研究所, pp. 1-46
- 林 四郎(1982)「臨時一語の構造」『国語学』131(国語学会), pp. 15-26
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- Gries, S. (2008). Dispersions and adjusted frequencies in corpora. *International Journal of Corpus Linguistics*, 13(4), 403-437.

付記 本稿は、JSPS 科研費 JP 22K00594 の助成を受けたものです。

(人文学研究科教授)